

# 事例報告の要約

分科会：美術・博物館/ホールなど施設系ボランティア

団体名(会員数)  北九州市立いのちのたび博物館  (62名)	(団体の住所/連絡先) 〒805-0071 北九州市八幡東区東田2丁目4-1		
	(電話) 093-681-1011	(FAX) 093-661-7503	(活動範囲) 博物館内
事例報告者	戸来義臣		
(タイトル)	「シーダー」という名の ボランティア		
<p>戸来(へらい)と言います。岩手県出身です。</p> <p>私は、長年、いのちのたび博物館の副館長として勤めておりました。博物館の立ち上げから、開館・その後のような形で軌道にのせて行くか・・・、そのような立場におりました。退職後は、ボランティアとして関わっております。したがって、今日の立ち位置は、博物館の立場が6割、ボランティアという立場は4割です。</p> <p>いのちのたび博物館は、20年の歴史を背負っております。</p> <p>平成14年に、旧自然史博物館、旧歴史博物館、旧考古博物館の3つの博物館を統合して、自然史・歴史博物館“愛称”「いのちのたび博物館」として開館しました。当初は、自然史博物館と歴史博物館の二つを造る予定でしたが、「同じ博物館ならくっつけて！」と結果的には、木に竹を接いだような博物館になりました。</p> <p>自然史は理系、歴史は文系で、性格の違う博物館が一つになっているので、運営面は非常に難しい、それはボランティア活動にもつながって来ます。</p> <p>この自然史と歴史をつなぐにはどうするかを考えたとき、それは自然と人間の関わりがどうあるべきか、ということだろうとして、その“つなぎ粉”を「共生」としております。</p> <p>この博物館の特徴でもあり、良さの一つに、自然史系がかなり優れているということです。自然史総合博物館としては、日本でもトップクラスであると自負しています。また、ここの博物館の面白さは、子どもの入館者が多いことです。ボランティア活動についても、当然、子どもにウエイトを置いた活動が求められます。</p> <p>ボランティアの立ち上げですが、聖書(バイブル)には、“新しい酒は、新しい革袋に”とありますが、それを逆に、新しい博物館には新しい発想を入れたい、という想いで動いてきました。そのため旧博物館時代のボランティア組織は解散し、開館後1年で、新たなボランティア団体を立ち上げました。</p> <p>ボランティアの名は、「シーダー」(seeder)としました。</p> <p>「シーダー」とは「種をまく人」で、「智の種をまいて欲しい、お客様にも自分自身にも」という願いが込められています。</p> <p>実は、当初、博物館の立ち上げに当っては、ボランティアの人がいなくても運営できる組織としました。その後博物館の良さを活かし、あるいは良さを一層引き立てさせるためにも、ボランティアを必要と考えました。</p> <p>「シーダー」というボランティア登録の条件ですが、館主催の研修の受講を前提としております。</p> <p>研修を受講後、ボランティアを希望すれば、「シーダー」に登録できます。</p> <p>登録期間は2年間ですが、その間に一定の出席率、月4回を必要としており、1日は午前と午後分けて考えますので、1日出れば2回出た計算となります。月に、丸2日であれば、4回の計算になります。</p> <p>これについては、東京の両国にある博物館がヒントとなりました。</p> <p>それは、両国の博物館のボランティアの中に相当我儘な人がいて、その人を「やめてもらおう！」としたら都知事さんに直訴されて切ることが出来なくなった、という例があったようです。このため「いのちのたび博物館」では、名前だけのボランティアではなく、キチンと活動した人だけを更新することとしました。</p> <p>ただ、本人が病気になったり家族が病気になる場合もありますので、いろいろな条件を加味して更新することとしております。</p> <p>いのちのたび博物館は、来年、開館10周年を迎えます。</p> <p>人間で言うならば赤ちゃんとしての免疫力がなくなる頃です。開館当初の“ご祝儀相場”は終わり、これからが本番と思っています。まさに今、博物館を運営する力が試されています。</p>			

(タイトル)

## 「シーダー」という名の ボランティア

博物館は生き物です。血が流れていること、組織が動いていることが必要です。どういう職員がいるかが気になるところですが、ここの博物館の良さは、優秀な学芸員がそろっていることです。現在、18名の学芸員がおりますが、自然史に11人、歴史に7人います。その内15人がドクター、博士号を持っています。自然史は、全員がドクターで、採用時の条件となっております。

館を運営する構成員は、事務職の職員、学芸員と我々「シーダー」が館の“3本の矢”であると思っています。このため、シーダーを育成する意義は大きいと考えています。

「シーダー」には 現在、62人が登録されております。男性が27人、女性が35人で、若い人の割合が高いことと有識者の多いのが特徴です。パートで働いている人や、学生もいます。また掛け持ちでボランティアをやっている人もいます。

活動の内容は、展示物の解説です。学校から体験学習として子どもたちが来ます。あるいは団体が来ます。その際の展示解説や、講座の補助としてお手伝いをしてもらうことです。今は、自主事業として紙芝居をやったり、小倉織の実演や折り紙などの指導も行なっています。

ここの展示物の解説は、非常に難しいと思っています。その理由として、自然史は理系、歴史は文系だからです。理系・文系どちらも得意という人はなかなかいないと思われることと、良い展示物が非常に多いので、自分の好きな部分だけ受け持つ訳にはいかないからです。なかなかしんどいボランティアですが、「シーダー」ですので、自分で勉強していくべきだ、と思っています。

また「シーダー」は、次のような役割も持っていると考えております。

- この博物館は北九州市立ですが、「シーダー」は市立博物館、という意識は持っておりません。北九州市としての社会貢献の有りように協力をしているという想いです。「シーダー」は市内の住人に限っている訳ではありません。入館者の7割位は市外の方です。このため遠くから来てくれて“有難う”という気持ちで対応しています。
- 次に、この博物館の良さともいえるものに、教職の資格をもつ先生が4人いることです。この4人は、学芸員の代替ではなく 子ども専門・学校専門の先生です。MT(ミュージアムティーチャー)と呼んでいます。MTで気になっていることに、この人たちの負担が重くなっていることです。シーダーで幾らか軽減が出来ないかな、と考えております。

「シーダー」が抱えている問題点は、二つあります。

- 一つは、組織に会長とか代表者等のまとめ役がないため、まとまりに欠けることです。これは、「シーダー」を立ち上げる時『適当な人』を探しましたが見つからず、今に至っております。また、活動は「何曜日が誰それ」というような決りはなく、自由裁量で来ていますので『自由である』というメリットはありますが、いろいろな活動をしよとする場合には、少し弊害があるのかな？と思っています。さらに、「シーダー」をコントロールするに、館側がどう考え、関わるかも今後の課題でしょう。
- 二つ目ですが、「シーダー」の再教育と自己研鑽の問題です。ここの展示解説が非常に難しいことは前にも述べました。歴史は一定の年齢になると得意になるようですが、自然史に関しては地球の生い立ちから始まり、進化へと続きます。分野も石から生き物、生き物は分類から生態までと、広範囲に及び奥が深いから難しいのです。そこで、個人個人の自己研鑽をどうするのか、博物館として、どう教育していけば良いのかが問われてくると思います。これらの問題解決のタイミングは、節目の年である開館10周年目、来年だろうと、考えております。

最後に、私の私的ボランティア論をご紹介します。

私は、博物館を退職したときボランティアをすることとしました。我々人間の学名は『ホモ・サピエンス』で、『賢い人』という意味ですが、このホモ・サピエンス的生き方をしたいと思っています。その生き方には三つあると考えておりますが、一つは新しいものを作り出す「創造」です。二つ目は、「真理を追究」する。三つ目は、「奉仕をする」ことだと思っています。この「ホモ・サピエンス的生き方を追究」することが博物館で「シーダー」をすることだ、とったりしております。小さな子ども達に対しては「知」の世界への架け橋となるように、大人に対しては「智の世界でともに遊びたい」と思っております。

私は、いのちのたび博物館の“コンシェルジュ”でありたいと、思ってシーダーをしています。